

TEEP

進化型実務家
養成プログラム

VOL.15

NEWS LETTER

進化型実務家 養成プログラムへの扉

TEEPコンソーシアムでは、実務家養成プログラムを進めるにあたり、ニューズレターを通して現役の実務家養成がどんな思いで、どんな活動をしているのかを5回にわたって伝えてきました。今回は、名古屋学芸大学で実務家養成として教壇に立つメディア造形学部デザイン学科の富安由紀子教授にご登場願いました。現在もデザイナーとして第一線で活躍されつつ、新たな研究&教育領域としてデザインプロデュース領域の立ち上げ、挑戦し続ける実際の現場を以下で紹介いたします。
(文・鵜飼宏成)

実務家養成インタビュー ⑤

インタビュー

●名古屋市立大学大学院 経済学研究科 教授 鵜飼宏成



名古屋学芸大学
メディア造形学部
デザイン学科
学科長 教授
富安 由紀子

愛知学院大学の学生が企画した商品「くるくるなごみかん」などのパッケージデザインを、富安先生のゼミに依頼しました。その時からモノを作るだけにとどまらず、コトのデザインや経験のデザインといったものにまで広めて、実務教育として深められていたのではないのでしょうか。

富安 その10年は、私が大学に来てからの10年と重なっています。現在もデザインは日に日に変化していますが、デザインという領域自体が実学であり、人の営みそのもの。実務家養成と聞いて、デザインでは実務家じゃない人が教えることってあるのかな、と思いました。

鵜飼 今回のTEEPを考えるにあたり、意識したのは「段差」です。大学に比べて実業界の進化が早く追いつけない。その段差をいかに埋めるかという問題です。デザイン領域における段差はありますか。

大学と産業界の段差をなくす

実業の比重大きいデザイン領域

鵜飼 富安先生とは10年ほど前、藤が丘中央商店街(名古屋市名東区)のまちづくりで一緒にさせていただいてからのご縁です。当時、私が担当していた



研究活動であるインナーブランディングのための社内研修を外部企業と遠隔で

いけないのでしょうか。正直、汎用性はなく、これは属人性だろうと開き直っている段階です。

鵜飼 最後に、実務家養成としてのやりがいは。

富安 今はデザイン領域そのものをデザインしている、デザインそのものを再定義しているのが面白くて仕方ないという感覚があります。時代はものすごく早く変化していて、デザインはそれを如実に反映するものですが、

自分にとっては心地良い。「面白い変化の時代に間に合ってたよかったな」というか、その流れを体感できていることがやりがいです。

鵜飼 そうした教育で、どんな学生が卒業して、どんな成果を残すのか楽しみです。先生にとって最大の「作品」は学生なのかもしれませんね。本日はありがとうございました。

富安 由紀子

プロフィール

名古屋学芸大学メディア造形学部デザイン学科教授。愛知県立芸術大学美術学部デザイン専攻、愛知県立芸術大学大学院美術研究科デザイン専攻修了後、GKグラフィックスに入社し、その後フリーランスとして活躍。デザイン思考とその実務展開、デザインプロデュースなどを研究テーマとし、デザインによるユーザー体験の充実を図る。tmgrf(トミグラフ)主宰。

鵜飼 教員が学生を見る間隔は?

富安 現場には週に1回か2回行く程度ですが、学生から来るLINEのメッセージは毎日見ています。他の大学から「これは授業ではなくゼミではないか?」と言われるほど、濃密かもしれません。うちは授業といっても多くて15人程度なので、人数的にも対応可能だからやっています。

鵜飼 問題はこれがシステムとして、人が変わっても続けられるか、ですね。

富安 ここ2~3年で、このやり方がやっと定着したところ。ある程度「型」ができたからですが、これが倍の学生数になったり、非常勤の先生ばかりになったりしたらできないでしょう。伝え方や教え方などで、もっと教員の側の「型」を作らないと

TEEP実施委員会では、コンソーシアムのさまざまな情報発信についても積極的に行っています。詳しくは随時以下のWebサイトに案内してまいりますので、ぜひご覧ください。4月より進化型実務家養成プログラム「基本コース」がスタートしています。5月末には「専門コース」の説明・相談会を計画しています。具体的な開催日時と方法については、Webサイトにのご案内させていただきます。

TEEP実施委員会事務局(名古屋市立大学 教務企画室内) <https://teep-consortium.jp/>

